池澤夏樹
ロング・インタヴュー
新井敏記
沖にむかって
泳ぐ

池澤夏樹
ロング・インタヴュー
新井敏記

沖にむかって泳ぐ

文藝春秋

沖にむかって泳ぐ

池澤夏樹ロング・インタヴュー

1994年3月1日　第1刷
1994年3月25日　第2刷

著　者　池澤夏樹・新井敏記

発行者　阿部達児

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京 03(3265)1211(代)

定価はカバーに表示されています

印刷所　精興社

製本所　中島製本

万一落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送り下さい。

© Natsuki Ikezawa／Toshinori Arai 1994
Printed in Japan
ISBN 4-16-348860-X

目次

環礁までの、作家の泳ぎ　7
1　読む幸福と書く不幸　11
2　心優しき伴走者　47
3　架空の土地を物語る　83
4　自分の場所、そこからの移動　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 物語の誕生から世界の終わりへ 149
6 失われた終末 195
池澤夏樹自著解説 225
あとがき 246
索引 253

装丁　坂川栄治
カバー・本文写真　垂見健吾

沖にむかって泳ぐ

環礁までの、作家の泳ぎ

新井敏記

何故、ぼくたちは小説を読むのだろうか……。

作品を読む。まず最初に、ぼくたちが学ぶのは広くて大きな人間観かもしれない。ある主人公を通して、社会と個人の関係を不思議な力で押し上げる小説から体現される多くの事象……。

再読。さらに深い成長の軌跡をその舞台となる時代に重ね合わせて具体的に知ることになる。主人公に自分自身を投影して登場人物に想いを馳せることもあるかもしれない。

読者が常に知りたいことは決まっている。ぼくたちはどこにいるのだろうか、そしてどこへ行こうとしているのだろうか。次にどうなるか知りたいのだ。

インタヴューは本を読む姿勢に似ている。とどのつまり作家が内包するテーマを、様々な作品に照らして、自分の位相を確認すること。作家池澤夏樹の肉声を通して、読書という、ある種の輝きを持った一瞬を共有したいと思うのだ。

ミクロネシアはヤップ島、沖縄は座間味島、そして東京。ここに収められたインタヴュ

ーは一九九一年から一九九三年まで、雑誌「スイッチ」及び「リテラリー・スイッチ」、そして「文學界」のためにいくつかの場所を移動して行われたものが骨格となっている。その三年の間に池澤夏樹の創作のスタイルは小説全体への大胆な問いかけをしつづけていたように思う。物語を書くのはただその瞬間に起こる、またその瞬間がその後に続く何かを呼びおこすかを説明するためだ。作家は可能な限り、自身が信じる方法によって、真実としてしか思えない感動的な状況をつくり、その中で信じうる人物を創造しようとする。

《朝から話をはじめよう。すべてよき物語は朝の薄明の中から出現するものだから》

池澤夏樹の長篇小説『マシアス・ギリの失脚』はこんな書き出しではじまる。

心細い思いをしている読者を作家は叙事詩を描きだすように優しく手を差しのべる。おかしくて、悲しくてわくわくする長い話である。なにしろ魔法の力が人を動かし、小さな飛行機も活躍する話である。ぼくはこの民話と神話が織りなす小説の構想から立ち会うことで、物語が成長するものだということを目撃する快感を味わった。

一九九一年の五月、小さな島ヤップの飛行場は厚い雲で覆われていた。タラップを降りると金網にしきられたゲートに、池澤夏樹の姿はあった。彼は『マシアス・ギリの失脚』の取材のためにこの島を訪れていた。二速しかないワゴンを駆って粗野なホテルに案内される。フロントの女性はぼくに言った。

「水は出ないので、毎日バケツ一杯を配給するからそれで用事を足す。飲料水は魔法瓶が別に配られるからそれを使って」

彼は「この島では水は貴重なんだ」と言って微笑むと顔を洗うためのコップ一杯、歯を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

磨くためのコップ一杯、体を洗うための三杯の水の使い方を教えてくれた。この島でのインタヴューは毎日午前と午後の二時間ずつ行われていった。この島の一番の山の頂き、旧日本軍の飛行場跡、風が渡る草原、人間の地図のように予めフィールドワークをして場所を変えたインタヴューが『マシアス・ギリの失脚』の背景と少しずつ重なった。

彼はなによりも場所を欲している、そうぼくは思った。珊瑚礁が隆起してできた小島が彼のお気に入りであった。昼はいつもそこで過ごした。

「ジョン・アップダイクの書評集に“HUGGING THE SHORE”という本がある。『岸にしがみついて』という意味でなかなか凝ったタイトル。アップダイクはフィクションとして沖に泳ぐのではなく、書物という岸辺、書評とは他人の作品にそった上での文章の作成だということでそのタイトルにしたと思う。作家は本当に沖にむかわなければいけない人種です」

ある時彼が言った。

――沖にむかって泳ぐ――。

彼はその代表的な作家の例としてフォークナーをあげた。

「フォークナーはもうアイデアが湧いて出てしょうがない人だから、自分の中からなんでも出てきて、それで一種憑依(ひょうい)した状態で強い力で書いて押し出していった作家です」

かつてパリス・レヴューのインタヴューでフォークナーは現代で重要な作家を五人リストアップした際、ヘミングウェイを四番目として、何故？　と問われてこう答えた。

「ヘミングウェイには失敗への勇気がない」

池澤は話を続けた。

「その意味でヘミングウェイは自分の体験というファクトから創作のスタイルを離れる勇気がなかったといえる。つまり岸辺にそってしか泳げなかったというわけです」

「自分の体験を書くということは間違っているのですか？」

ぼくは訊ねた。

「ヘミングウェイは自分の体験を書く。それはそれで正しい。力のあるいい方法であると思います。現に『キリマンジャロの雪』という小説はすごい話だと思う。しかし自分が体験したことという『岸辺』にしがみついている意味では、勇気がなかったかもしれない。それで晩年になって彼を非常に辛いところに追いこんだかもしれないね……」

彼はそう言うと海に入った。珊瑚礁に潮が満ちはじめてウサギの飛沫が立つと、振りむきざま手招きをした。その時の彼の眼はきみはどちらのタイプかと訊ねられているような気がした。

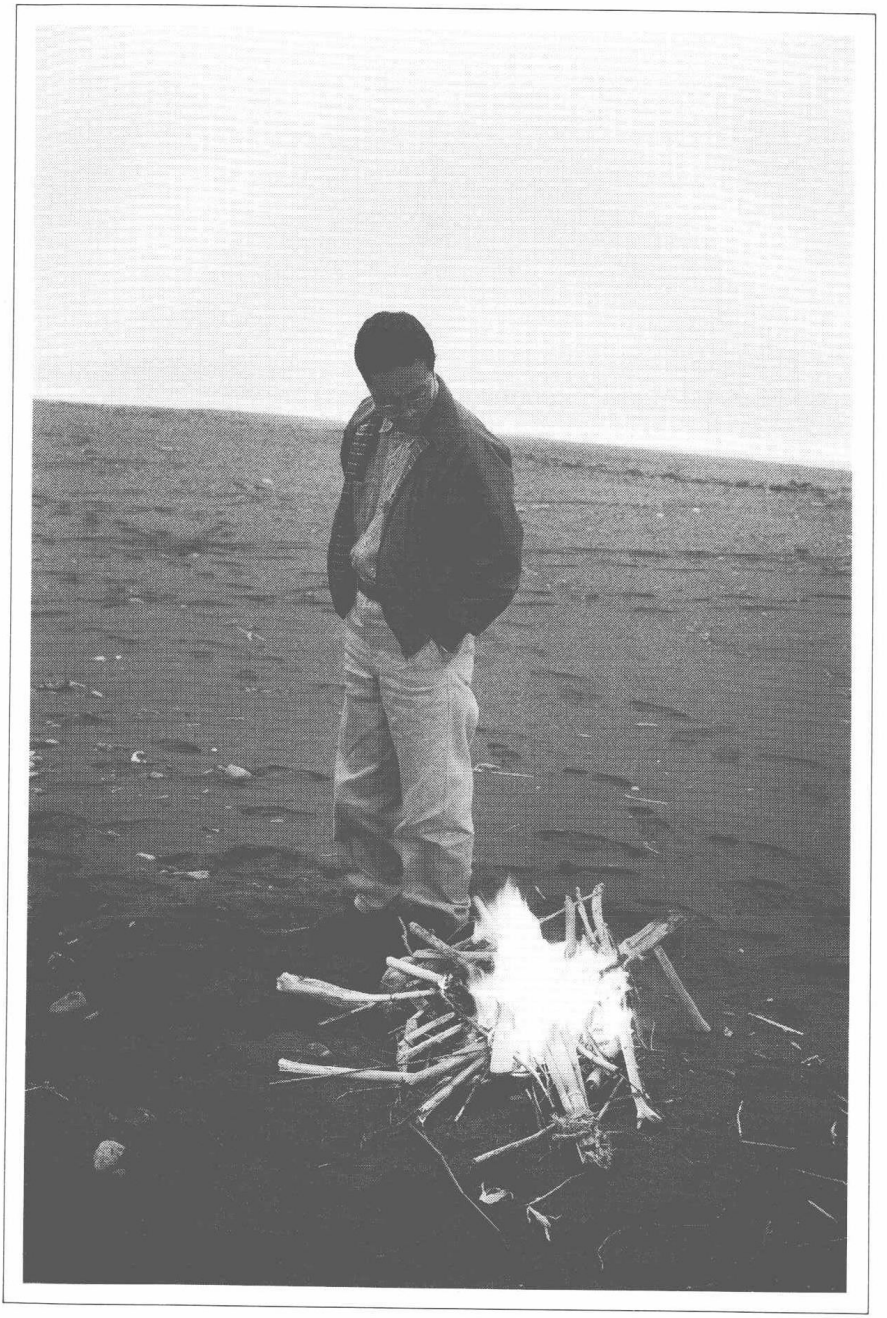
沖にむかって泳ぐタイプか、岸にそって泳ぐタイプか……。

小説の言語と批評の言語、科学の目と文学者の感性が渾然一体と成した作家の生成に立ち会うのである。その時ぼくが感じたものは新しい寂しさだった。作家もまたたいへんな勇気を出して生きてゆかなければならないと告げられ、そして納得したせいで出てきた勇気を寂しさとも錯覚したのだった。

フォークナーは創作のスタイルをこう解きあかしている。——作家は経験、観察、想像の三つを必要としている——

1

読む幸福と書く不幸



一冊の本がつなぐもの

――ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』から理科年表、李賀の詩までとジャンルを越え、その書評の対象として扱った本が『読書癖』。なるほどその書評された本の索引を見ても、池澤さんらしい性格がよく出た本読み術とも受け取ることができた。タイトルは読書術ではなく〝読書癖〟、この不思議な言葉は、思えば昔からの池澤夏樹さんの本に対する位相ともいうべきものです。

池澤 『読書癖』の「あとがき」に書いたように、世の中には本というものにからめとられる人生もある、それはもう趣味とか教養ではなくて、一種の性癖、つまり、読書癖というものではないだろうかと考えたわけです。ぼくは今後も読書論、書評論はこの『読書癖』のシリーズとして続けていきたいと思っています。

――池澤さんの読書論である「海図と航海日誌」(雑誌「スイッチ」に連載され、一九九四年単行本として刊行予定)は今までの読書論を体系化しつつ、書き手自身の相貌を浮かびあがらせるような形でもって書かれています。「文學界」の書評(雑誌「文學界」一九九〇年二月号から一九九四年二月号まで書評委員をつとめた)と合わせ見ると、池澤夏樹の中で本読み術というものが完成されつつあるのではないでしょうか。創作と批評の関係を『ブッキッシュな世界像』から『読書癖』にいたる池澤さんの批評本を手掛かりに具体的に教えて下さい。

池澤 『読書癖』を例にゆっくりと話していったほうがいいでしょう。

『読書癖』の1と2は一九八八年の一月から始まった北海道新聞のエッセイを軸に構成しました。この欄の一回は、原稿用紙でいうと二・五枚(千字)でした。その前にぼくは読売新聞で無

署名の書評を四年間担当していました。

――それは何年から何年までですか。

池澤 八四年から八七年だったと思います。

――それを北海道新聞が引き継ぐような形になったのですか。

池澤 そうですね。読売新聞の時は、新刊書を中心に年間三十本ぐらい書いていました。一回九百字の標準的な新聞書評。具体的には、勘どころを押さえて内容を紹介して、ちょっとひねって褒めるというところかな。新聞書評は短いからほめられない本は最初から取り上げないというのが原則です。悪口というのは論をたてて精密に言わなければ、単なる辻斬りになってしまう。ぼく自身それを四年間やって、やっぱり形に限界を感じたと思うのです。その形に飽きたかもしれない……。

――紹介していくという形にですか。

池澤 そうですね。九百字で一冊の本をきれいにさばいて見せるという、その快感だけでやっていたわけです。その方法にこっちが飽きて、なんというかもう少し緩やかな形式がほしいと思った。特に新しい本を論じる時、それ以前の類書との関わりまでは出せない。一冊の本を読んだことが別の本の方へ連想として拡がるという読書本来の楽しみがほとんど書けないわけです。

ぼくという個人を出した書評、あるいは書物論を書きたいという気持ちがあった時に、北海道新聞が器をあずけてくれた。これは枚数が決まってて、週一本必ず書く、しかし書物に関わる内容であるということ以外何の制約もなかった。新刊書を扱うのは構わないけれども、それは他に書評欄があるわけだから、紹介を旨とした標準的な書評にしなくていい。あるいはしな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com